

# ウィーン日本人学校における英語指導と実践

前ウィーン日本人学校 教諭

名古屋大学教育学部附属中・高等学校 教諭 薫 森 英 夫

キーワード：在外教育施設，ウィーン，英語教育，小学校の英語，国際交流，入試対策

## 1. はじめに

縁あって在外教育施設で教鞭をとる機会を頂いた。これにより、私は小学校から大学まで、英語に関する内容で授業・講義を行うという、本当に貴重な経験をした。その中でも、特にウィーン日本人学校での3年間は私にとって特異な体験であった。ここに、その概略を紹介したい。

## 2. 前任者からの引き継ぎと現実

### (1) 海外在住の児童生徒の語学力に対するイメージ

「海外生活の長い児童生徒や、英検合格者が何人かいて、概して児童生徒の英語力はかなり高い。」前任者から引き継いだ膨大な資料の中の一文に私は着目した。「さすがは在外教育施設。それなら高校レベルのテキストをたくさん用意しよう。」と私は考えた。しかし、自分の考えは過ちであり、この思い込みこそが多くの海外居住者に葛藤をあたえている現状を私は後に知ることとなった。

「海外で生活しているから英語が出来る。」私もそう思い込んでしまった、この根拠の無い考え方に、今までどれだけの人が苦しめられてきて、そして今後もどれだけ多くの人たちが苦しめられていくのだろうか。語学はどこにどれだけいたかではなく、どこで何をどれだけしたかにかかっている。しかし、海外居住者やその家族は、学年に関係なく、周囲から「海外に住んでいるから英語ができる。」と思われてしまいがちである。



外国人講師とのチームティーチング

### (2) 保護者や地域の要望と文部科学省の指針

#### ①保護者や地域の要望

ウィーン日本人学校の多くの関係者から、「子どもの英語力を高めて頂きたい。宜しくお願いします。」と激励の言葉を頂いた。小学校低学年の保護者からも、「英語が流暢に話せるようにして欲しい。」という要望がたくさんあった。それは日本と同等の教育を行うという在外教育施設の理念を超えた英語に対する期待だった。中学生に関しては、学習指導要領の内容以上に、学習塾、英会話スクールのような役割を果たすことを保護者や地域から要望された。「入試対策、英検対策はもとより、とにかく英語を話せるようにして頂きたい。」という要望の背景には、前述した海外子女に対するイメージが関係していた。

#### ②学習指導要領と英語（英会話）の授業の位置づけ

文部科学省より、新学習指導要領では小学校5・6年で週1コマ「外国語活動」を実施すると発表があった。さらに、外国語活動の意義は、「音声を中心に外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として様々な活動を行います。」とある。小学4年生以下に関しては、特に記述も

ない。つまり、小中学生の英語学習に関する文部科学省の指針と前述の保護者や地域の要望には、日本の学校以上に大きな隔たりが存在していた。

### ③ウィーン日本人学校英語学習指導指針（小学生は総合的な学習の時間）の作成

このような現実には学校として真摯に取り組むために、職員間で共通理解を何度も図る機会を持った。その結果、基本的には文部科学省の指針に沿い、なおかつ保護者や地域の要望にできる限り応えられるような、ウィーン日本人学校独自の英語の学習指針を作成した。（参考資料として、その一部抜粋あり）

## 3. 実践

ウィーン日本人学校独自の英語の学習指針を作成しても、それに沿った授業実践はもとより、いろいろ工夫した授業を行わなければ児童生徒の英語力向上は望めない。ここに実際に行った授業の工夫を紹介したい。



「救急車を携帯電話で呼ぶ」授業

### (1) 雰囲気作り

#### ①自信を持たせる ～わからない、できないから学校に来ている～

保護者の大きな期待に反して、多くの児童生徒が英語に苦手意識を持っていた。やはり英語は難しい、英語で発言するのは不安という考えがあったようだ。この不安を取り除くため、

年度当初に多くの時間を使って児童生徒に理解させたことがある。それは「わからない、できないことがあるから学校に学びに来ている。」ということだった。児童生徒は指名されると「正解を出さないといけない。」と思いつむ。それは間違いであり、失敗をおそれず、自分なりの英語で発言すること、友達の発言を尊重することを説いた。すると、「正解を出さないといけない。」という思いから、「思った事を言いたい。」という考えに変わり、児童生徒が英語で発言することに不安を感じなくなり、授業の雰囲気、英語に対する興味関心が大幅に向上した。

#### ②課題の提示 ～やるべき事は山ほどある～

英語学習指導指針をもとに、児童生徒が学ぶべき内容を前もって具体的に示すことにより、現在学習している内容が今後につながる事が明確になり、児童生徒の意識向上につながった。「こんなことが英語で言えるようになるんだ（又は言えるようになったんだ）」という期待感や達成感をもたらした。

#### ③教師がモデルに ～先生のように話したい。自分もなれる？～

外国人講師と難しい話題でもナチュラルスピードで話す教師を見て、「いつか自分もあのように英語で話したい。」と思わせた。そして、そのような英語の先生が小学生や中学生だったころは、今のウィーン日本人学校のどの児童生徒よりも英語が話せなかったことを伝え、努力をすれば英語が流暢に話せるという希望を持たせた。また、完璧なネイティブの発音ではなくても、正しいイントネーションを用いて話すことが大切なので、英語を話すことにコンプレックスを感じる必要がないことも伝えた。

### (2) 英語を使用した授業実践

英会話の授業において、外国人講師とのチームティーチング（以下TT）では、特定のフレーズの反復練習以外は基本的にオールイングリッシュで行った。中学生の英語の授業においてはTTの授業も、そうでない授業も細かい文法説明以外は、8割以上英語で授業を進めた。転校してきたばかりの生徒は初めはやや戸惑いを見せたが、個別指導により英語を話す力・聞く力を短期的に向上させ、数か月のうちに問題なく授業に参加できるようになっていった。

### (3) 予習を求めない代わりに、毎回のように行われる復習テスト（中学生）

(1) ②にも示したように、児童生徒には今後どのような表現や文法を学ぶべきかをあらかじめ教えた。現在学習していることが今後の基礎になるので、その学習内容の定着を図るために、反復練習を兼ねて小テストを実施した。特に中学生にはほぼ毎回のように行った。内容は、前回の授業内容の復習で、聞き取り、書き取り、スピーチなどであった。仮に小テストであまりできなかつたとしても、「次までにできるようにまた復習しよう。」と粘り強く反復することを求め、徹底的に定着させるようにした。

### (4) 特徴的な定期試験とその活用（中学生）

授業内容の定着度合いを測るのが定期試験である。しかし、ウィーン日本人学校では、前述したように授業は普段から英語で行っているため、「聞く・話す」力は授業内で評価できた。同様に、異文化理解や読む力に関しても、授業内で様々な取り組みを行っていたので、授業内で評価できた。そこで、定期試験では、残った単語・熟語・英作文等の「書く力」に特化した問題にすることが可能であった。

#### ①主に単語・熟語・英作文に特化した定期試験

英語を読んだり、書いたりする時はもちろん、話したり、聞いたりする時も単語や熟語は必須である。また、英語が書ければ訳せるし、英語を話そうとすれば意識的に、又は自然に頭の中で作文を行っている。これらを鑑みて、定期試験の出題は、主に単語・熟語の書き取りと英作文に特化して行った。結果として、生徒の英語力、特に「書く力・話す力」は飛躍的に向上した。

#### ②定期試験後の再試験と反復する出題

定期試験には一定期間に学習した内容の最重要部分を詰め込んでいる。よって定期試験内容の定着を図ることは、今までに学習した内容の定着を図ることにつながる。そのため、基本的に全員を対象に再試験を行った。また、過去の出題内容と重複する問題も必ず出題し、反復して学習する機会を与え続けた。

### (5) 学校行事と照らし合わせた実践の場

伝統的に行われている下記の行事では、英語を用いて日本文化を紹介したり、英語の授業に参加したり、英語で接客したりする機会がある。単発行事としてではなく、各学期にいずれか一つを毎年行っているため、実践的な英語コミュニケーションの機会となり、生徒にとって、良い刺激になっている。

#### ①現地校訪問（小学校5年生以上対象）

ニーダーエスターライヒ州プルカウにあるプルカウ校を訪問する。授業や交流はドイツ語で行われるが、本校児童生徒のドイツ語力には限界があるので、会話に困った場合は英語を使用する。英語力次第で内容に対する理解度、行事に対する満足度が左右されるので、児童生徒にとって英語習得の良い動機となる。

#### ②インターナショナルスクールの授業参加（中学生対象）

ウィーン日本人学校の隣にはVienna International Schoolが、開校当初ウィーン日本人学校があった19区にはAmerican International Schoolがあり、年に一度訪問して、英語、数学、理科、体育などの授業を受けている。授業内容の理解は英語力に左右されるので、英語力が高い上級生ほど満足度が高くなる。

#### ③国連バザーでのボランティア活動（中学生対象、自由参加）

第3の国連都市ウィーンでは、毎年国連バザーが行われる。本校生徒はそこで販売補助などのボランティア活動を



国連バザーでのボランティア活動

行う。任意参加ではあるが、毎年生徒の興味関心が非常に高く、高い参加率を維持している。仕事内容の説明や接客はすべて英語で行われる。世界各国の人々と英語で話すだけでなく、国連の活動に携わることのできる絶好の機会である。これも英語力がある上級生ほど満足度が高い。

#### 4. 成果と課題

##### (1) 成果

多くの保護者や地域の方から、「英語の力がついてきたので、今後ともよろしくお願ひします。」と激励されるようになった。英語だけはとても苦手だといっていた生徒が英検準2級に合格したり、全国レベルの模擬試験で満点を何度も取る生徒が何人か現れた。また、中1から3年間、合計12回、前述したすべての国際交流的な行事に参加した生徒は、回を重ねるごとにコミュニケーション能力を向上させていった。中学3年生になるころには、教師の助けを必要とせず、しっかりとインターナショナルスクールで授業を受け、ボランティア活動を行うことができるようになった。「回を重ねる毎にだんだん話せるようになり、相手の言っていることも理解できるようになったから、楽しくなった。普段の授業のおかげで自分の力がついてきていることを毎回実感出来た。」と話していた。

##### (2) 課題

3年間かけて、小学校1年生から中学校3年生までの一貫した学習指導目標を作り、それぞれの学年の学習指導計画を作成して、ある程度しっかりした英語教育の土台を作り上げてきた。しかし最大の課題は引継ぎである。いろいろな引継ぎを文書としては残せるが、様々なシステムが出来上がった背景や流れ、授業の雰囲気などは口頭でしか引継ぎえない。今のシステムでは、対面での引継ぎが不可能であり、そのことが引継ぎを不完全している点が大きな課題である。

#### 5. おわりに

今回、ウィーン日本人学校で3年間英語を教える機会を頂いたのは、私にとって本当に大きな財産となった。日本をはじめ、世界各国から引っ越してきた小学校1年生から中学校3年生に対して、英語の楽しさ、大変さ、素晴らしさを伝えられたのはこの上ない喜びである。全国各地から来られた、ユニークなバックグラウンドを持つ先生方と、英語教育について意見交換ができ、それを子どもたちに還元することができた。また、カナダ人、オーストリア人からも異なった視点での教授法を学び、それを活かして、よいチームワークをもって児童生徒に英語を教えられたことも、貴重な経験である。そして子供たちをはじめ、保護者や地域の方々からたくさん感謝されたことはよい思い出でもある。今後はこの3年間で培った英語教育のノウハウを、日本で実践し、たくさんの生徒や地域に還元していきたい。また、いろいろな形でこの3年間を支えてくれたすべての人々に心から感謝したい。

#### 6. 参考資料

学年別 目標とする英語力（総合的な学習の時間）早見表（ウィーン日本人学校英語指導指針より一部抜粋）

	聞く	話す	書く	読む
小学 1年	初歩的な英語を聞いて重要なものの名称や動作を理解できる。	初歩的な英単語を用いて、ものの名称・動作を伝えることができる。		大文字のアルファベットが読める。
小学 1年	初歩的な英語を聞いて、重要なものの名称や動作を理解できる。	初歩的な英単語を用いて、ものの名称・動作を伝えることができる。		大文字・小文字のアルファベットが読める。



小学 3年	初歩的な英語を聞いて、 what, whoを使った簡単な 英語の質問を理解できる。	初歩的な英単語を用いて、 ものの名称・動作を伝え ることができる。	大文字・小文字のアル ファベットが書ける。 ローマ字表記ができる。	初歩的な英単語が読める。 初歩的な英語の質問が読 める。
小学 4年	初歩的な英語を聞いて、 what, who, where, whenに be動詞を使った簡単な英 語の質問を理解できる。	初歩的な英単語を用いて、 伝えたい意思をbe動詞を 用いた簡単な文で伝える ことができる。	大文字・小文字のアル ファベットが書ける。 答えの中心となる簡単な 名詞・動詞が書ける。	初歩的な英単語が読める。 初歩的な英語の質問が読 める。
小学 5年	基礎的な英語を聞いて、 what, who, where, when, howにbe動詞や一般動詞 を使った英語の質問を理 解できる。	基礎的な英単語を用いて、 伝えたい意思をbe動詞を 用いた簡単な文で伝える ことができる。 ある程度の自己紹介がで きる。	ブロック体で簡単な文が 書ける。 話し手が言った簡単な文 が書ける。 自分が伝えたい意思を簡 単な文で書ける。	基礎的な文が読めて、内 容が理解できる。
小学 6年	基礎的な英語を聞いて、 what, how, who, which, why, whose, whenにbe動詞や一 般動詞を使った英語の質 問（複数形、過去形、進行 形を含む）を理解できる。	基礎的な英単語を用いて、 伝えたい意思をbe動詞や 一般動詞を用いた簡単な 文で伝えることができる。 ある程度自己紹介がで きる。	ブロック体で簡単な文が 書ける。 話し手が言った簡単な文 が書ける。 自分が伝えたい意思を簡 単な文で書ける。	基礎的な文が読めて、内 容が理解できる。
中学 1年	基本的な英語を聞いて、 小学校6年生までの目標 に掲げられている質問の 他、教科書に掲載されて いる程度の文を理解で きる。	基本的な英単語を用いて、 自分が伝えたい意思を文 で伝えることができる。 身の回りのものを紹介す ることができる。	話し手が言ったこと、自 分が伝えたい意思をブ ロック体・筆記体を問わ ず文で書くことができる。 教科書に掲載されている 単語・熟語が書ける。	基礎的な文章を読んで内 容を理解できる。
中学 2年	海外旅行で使う程度の英 語を聞いて、話し手の意 向を理解できる。 教科書に掲載されている 程度の文を理解できる。	基本的な英単語を用いて、 自分が伝えたい意思を文 で伝えることができる。 ある程度自分の経験や意 見を伝えることができる。	話し手が言ったこと、自 分が伝えたい意思をブ ロック体・筆記体を問わ ず文で書くことができる。 教科書に掲載されている 単語・熟語が書ける。	基本的な文章を読んで内 容を理解できる。
中学 3年	海外旅行に必要な程度の 英語を聞いて、話し手の 意向を理解できる。 教科書に掲載されている 程度の英語を理解できる。	標準的な英単語を用いて、 自分が伝えたい意思を文 で伝えることができる。 ある程度自分の経験や意 見を伝え、相手と議論す ることができる。	話し手が言ったこと、自 分 が伝えたい意思をブロッ ク体・筆記体を問わず文 章で書くことができる。 教科書に掲載されている 単語・熟語が書ける。 この段階での語彙定着は 1500語程度を目安とする。	標準的な文章や300語程 度の長い文章を読んで、 内容を理解できる。